

## 第19回 ハローアルソンフィリピン医療ボランティア 現地活動報告

2025年2月6日

羽田空港

午後10時。今年も昨年同様フィリピン航空を利用する。集合時間前だが既に集合場所には数十人のメンバーが集まっている。

今年は全国から110名の参加者、内、高校生24名、中学生3名(親同伴)が現地参加を希望してくれた。世界的な物価高、そして円安の影響で参加費用も高騰する中、沢山の方に応募頂き心から感謝する。

空港では毎年恒例となっている「10キロ物資」が配布された。これは機内に預ける荷物は一人、2つ(23キロ以内)というルールを利用し毎年参加者お一人、お一人に1袋10キロを目安にした物資をお願いし現地に輸送している。100名であれば100袋、1トン分の物資が無料で輸送できる。また、出来る限り荷物の中に歯ブラシやタオルを入れ込み、出国手続き後、空港内で朝礼が始まった。



2月7日 マニラ・ニノイ・アキノ空港到着 AM 5:25

無事入国手続きを終えた。今回110名がA・B・Cの3つ、各3班、計9班編成に分かれ、それぞれのバスに乗り込んだ。

天気は曇り。灼熱の・・・を期待していたがとても活動しやすい天気となった。

医療奉仕活動初日

San Andres Sports Complex 704 Malate Manila

首都マニラ市中心部に位置するエリア。このエリアには約6,000~8,000人の住民が住んでいる。

都会のスラムは絶えず人の出入りが激しくバラングイ(集落)の責任者も正確な人数は把握できていない。住民たちは主に市場で物売りの仕事をしているがほとんどが無職であり、一日の収入は約500ペソ(一日約1,300円)である。ここで病気になれば無料のメディカルセンターを受診できるが、薬、処置などは有料となるため住民たちのほとんどは「我慢」をするだけだ。



### 医療奉仕活動

今回の会場は新たに建設された市営の体育館を使用した。3 台の大型バスが到着するとみんなが一斉に器材や物資を搬入する。私は中に入って驚いた。なんと冷房がかかっている。過去 19 回の活動でこんなにも快適な会場があったであろうか。恐らく、現地チームが事前に交渉し準備してくれたのだろう。

AM 10:30 よいよ 19 回目の現地活動が始まった。今回のブース編成は「受付・物資配布ブース」「患者誘導」「問診」「保存(虫歯を治す)」「抜歯」「クリーニング」「義歯」「耳鼻科」「消毒」「投薬」そして「撮影班」に分かれる。

さらに高校生たちはそれぞれ決められたブースに入り、先生たちの補助に入る。



今回もやはり抜歯の希望が多い。フィリピンでは 1 本の歯を抜くためにかかる費用は約 500~600 ペソ、日本円で約 1,400 円となる。スラムの住民の一日の収入分である。

そして薬代やその後の治療は別途となる。今日食べることに困窮する彼らにとって虫歯 1 本の治療は大きな負担となるため、ほとんどの住民が限界まで我慢をするか、歯科医師免許を持たない闇医者のような存在の者に安価で抜歯を依頼する。

そのため私たちハローアルソンの活動を求める自治体、バラングイ(集落)は多く、この 19 年間で築き上げた信頼により、現在その依頼は 8 年後まで埋まっている。

子供たちの泣き声が体育館中に響く。恐怖で口を開けられない子、暴れてしまいどうしても抑えなければならぬ子……。子供の抜歯については本人だけではなく、親の同意を得て行う。現在の状況、痛み、感染を確認し将来の病状の変化も説明して行く。しかし、その歯のほとん

どは日本では治療が可能な歯だ。しかし慢性的な栄養不良下にあるスラムの子供たちの中にはたった 1 本の虫歯の菌が全身に影響を及ぼし命を落としてしまう子も少なくはない。そのため危険性が高い感染歯の場合は問診で十分説明し治療を行う。



## 2月8日 医療活動2日目

今日は首都マニラ市中心部から車で約40分に位置するカビテ市。数年前に高速道路ができた為かなりの時間短縮となった。しかし世界的にも有名なフィリピンの渋滞はどんなことが起きるかわからない為、今日は早朝7:30にホテルを出発する。

そして、先導は今年も現地メンバー・ラハ・ソライマン・ロータリークラブの消防車、救急車が努めてくれる。バスに物資や器材が手際よく運び込まれ全員がバスに乗車したことを確認し、いよいよ出発だ。けたたましい消防車のサイレンがマニラの朝に響き渡る。

今日は海沿いに面しているスラム。その壮絶な光景そして貧困の現実をまだ参加者たちは知らない……。



## Purok Sinuguelasan Barangay

ここは海沿いのスラム。3つのバラングイが一つにまとめられ、現在15,000人以上の人達が生活をしている。職業は主に漁業で一日の平均収入は250ペソ、日本円で約650円程度だ。バスを降りると浜風に乗って鼻を劈くようなスラムの臭いがする。会場の外に目をやると一面焼け焦げた家屋の風景が広がる。



### 「貧困の現実」

私はこのエリアに昨年の10月、そして12月に事前調査の際に2度訪れた。

初めて訪れた10月、この海沿いには数百の家屋が存在した。家屋といっても竹や木、トタンを括り付けただけの住居だ。住民たちは漁業を生業とし、私が訪れた時は大量のムール貝の殻を外す仕事をしていた。大人の中に子供も混じり、数千個の貝を叩いては取り、バケツに入れていたが、1キロの貝を剥いて約30～60ペソ、日本円でわずか100～200円にしかならない。そしてその臭いはあまりにも強烈だったが、「生きるため」にひたすら働く子供たちの姿にスラムの過酷さを改めて感じた。



その2か月後、最終調査の為訪れた時、スラムの風景は一変していた。あれほどあった家屋の3分の2が真っ黒に焦げに消失していた。住民たちの影はなく、賑わっていた海沿いに人の気配がない。

現地メンバーが言った。「政府がこの地域を埋め立てる政策を発表しました。住民たちに立ち退きを要請していますが、元々住むところがない彼らはその要求に応じることができません。そのためにはどうしたら良いですか？」私はその質問に悩んだ。そしてある一つの恐ろしい方法が頭を過った時、彼は言った。「そうです。火事にして家ごと無くしてしまおうのです。」「勿論、犯人を断定することはできません。しかし、これはスラムでは珍しいことではありません。」「無理やり立ち退かせるために誰かが火を放ち、住めなくすればいい。そして政府は全世帯ではなく、一部の人達にだけお見舞金として一世帯当たり10,000ペソ(約26,000円)を支払いました。」

「みんな誰が何の目的でやったか知っていますが犯人を捜すことはしません。しかし唯一の救いはこの火事は決して夜間に発生しません。なぜなら人が死んでしまうから。大抵このような意味の火事は昼間に起こります。」

私の目の前に広がるスラムの残骸は物質的に満たされた私たち日本人には十分過ぎるほどの貧困の現実を教えさせた。



### 医療活動開始

#### 歯を残す！！PASTA & CLEANING

抜歯ブースが「悲しみのブース」と例えるならここ「PASTA」「CLEANING」は「笑顔のブース」といえるだろう。PASTA とは保存治療、虫歯を削って白い詰め物を入れ治していくブース。CLEANING は歯科衛生士さんたちによる歯石除去や歯ブラシ指導をするブースである。特に CLEANING ブースは今まで他人にお口の中を掃除してもらったことのないスラムの人達にとって間違いなく人生最初で最後の瞬間だろう。

#### CLEANING ブース

今回 11 台の移動式の超音波スケーラー(除石機械)を準備し、参加した歯科衛生士さんたちがフル稼働でお掃除、そして最も大切な歯磨きのやり方を指導してくれる。そこに高校生たちは事前に日本から用意してきた現地語(タガログ語)で書かれた歯ブラシ絵本を持って住民の皆さんに歯ブラシのやり方を説明してくれる。

はじめは緊張し、小さな声の高校生たち。私は言った。「言葉など間違ってもいい！笑顔で楽しく大きな声で話してごらん。」通訳も参加し、高校生達の歯磨き教室が始まった。住民たちは歯ブラシを手に取り、たどたどしいタガログ語に笑顔を浮かべながら、皆さんからご協力頂いた歯ブラシを楽しそうに上下に動かす。会場には笑い声が絶えない。



## PASTA ブース

一人の少女が私の所に来た。まだ 14 歳。上の前歯 4 本が虫歯だ。黒色に変色し、かなり大きな虫歯だ。勿論日本では治療が可能であるが、ここでは抜歯の対象となる。本人もどこか諦めかけた表情で私の前に座った。私はミラーとライトを持ち診査する。そして尋ねる。「もしこの歯が無くなったらどうするの？入れ歯を作るの？」彼女は答えた。「いいえ、お金が無いから入れ歯は作れない。」私は更に尋ねた。「今まで治療は受けなかった？前歯が黒くなる前に何とか病院に行けなかったの？」彼女は少し下を向きながら言った。「私は兄弟が 6 人いる。私は一番上。下の弟が病気です。だから私は学校に行かず弟のために働いている。私の歯なんて治療できないでしょ。」

私は彼女に説明をする。「抜かないで治そう。」彼女は一瞬何を言われているのかわからないような困惑な顔をした。私は続けた。「君はこれまで一生懸命兄弟の面倒をみてきたね。偉かったね。」「今日本当は人数の関係上一人につき 1 本の治療しかできない約束だけど、先生が一番上手な先生にお願いしてあげるからこの歯を抜かないで綺麗に治そう。」彼女は少し照れくさそうに涙ぐんだ。私はカルテに「PASTA」のサインをし、私の大学の同期でもあり静岡県 天ま歯科医院 鈴木親良先生に直接その子を紹介した。先生が再び診査をすると、やはり大きな虫歯のため、残せるかどうか判断が難しそうだった。

私は先生に彼女の事情、そして彼女の人生にとってわずか 14 歳にして前歯を失うことの大きさを話した。彼は黙ってうなずき、「分かった。」と一言だけ言ってやさしく少女を座らせた。私が彼にお願いしたのは技術的なこともさることながら、長年の友人として彼の優しい心を誰よりも知っているからだ。そして彼も子供たちの大切な歯が失われていく現状に心痛め、1 本でも多くの歯を残したいという思いから、今回新たな治療方法と大変高価な薬剤を実費で用意し活動に臨んでくれていた。私はまだ不安げな少女に「大丈夫だよ。」と声をかけ全てを彼に託した……。



## 新たな 1 歩

医療活動終了の時間が近づいてきた。今回治療を希望される全ての患者さんを受け入れ、後はそれぞれの治療が終了するのを待つだけだ。

私は数時間前に鈴木先生に紹介したあの少女が気になり彼のブースに足を運んだ。その時、ちょうど先ほどの少女の治療が終了し鈴木先生と一緒に写真を撮っていた。

そして彼が私を呼び、「セキ、見てよ。虫歯が深かったけどこれなら痛み出ないから大丈夫

だよ。」と嬉しそうに叫んだ。私は彼女の前歯を見せてもらった。「良かったね。とてもきれいになっね。」彼女は手渡された手鏡をみてまた照れくさそうに今度は涙ではなく満面の笑みで微笑んだ。



#### 医療活動最終日

Felipe G. Calderon Elementary School. Tondo Manila

活動最終日は私たちが長年支援を続けている「トンド地区」だ。ここは1980年代「スモークー・マウンテン」と呼ばれる「ゴミ捨て場」が存在した地域だ。そこにはゴミの中からお金に換金できる物を拾い生活をするスカベンジャーと呼ばれる人たちが数万人生活をしていた。現在ここは閉鎖され別の場所へと移動したが、今もこの地域はフィリピン国内でも最も貧しい地域でありそして最も危険な地域でもある。

AM 8:30 会場の受付前には既に住民たちが最後尾が見えないほど長い列をなしていた。各ブースが手際よく作られていく。今日の会場はこの地域の中心に位置する公立の小学校のバスケットコートを利用する。今日は日曜日とあって授業はない。そのため地域住民の人達もこの敷地内に入ることができる。



## 「活動の核・消毒ブース」

医療活動の場合、中心となるのはやはり「治療」ではあるが、実はもっとも重要で体力的にも過酷なのは歯科助手さんたちで構成される「消毒ブース」だ。

「消毒ブース」は主に治療会場の中心部、または全体を見渡せる所に配置される。

現在、当会は 250 を超える抜歯器具を有するようになった。これは長年にわたり全国の歯科医院や先生方からご寄付頂いた物で、思い出せば 10 年前にはこの 5 分の 1 ほどの器材しかなかったわけで皆さんのご協力には感謝しても感謝しきれない。

ここには基本セットよばれる患者さん一人一人に使用する器具や抜歯器具、麻酔器具が 沢山配置され、使用した器具を洗浄、消毒、乾燥させる薬液等が準備されている。また、抜歯された歯牙、使用した麻酔針など血液の付着したものは大変危険で、慎重に扱わなければいつ自分自身を傷つけるかわからない。

毎年各医院から参加される歯科助手さんに担当してもらうのだが、不慣れな環境と活動中はほとんど座ることができないため体力的にも相当な疲労だろう。

私たちが可能な限り安全な治療を提供できるのもこのブースで一生涯懸命活動をしてくださる皆さんのお陰だ。彼女たちこそがこの活動の屋台骨であり、彼女たちの頑張りとおん張りに心から感謝をする。



## 「一生で一度の入れ歯」

私たちが支援をする地域では一つの入れ歯を作るのに約 6,000~15,000 ペソ(1 ペソ約 2.6 円)必要となる。彼らの一日の収入は約 300 ペソ。今日食べることに困窮する彼らが数日分の収入を費やし、入れ歯を手にし、再び「噛む」という喜びを得ることは限りなく難しい。

そのため私たちは歯科技工士さんたちの参加によって可能な限り入れ歯の製作を行っている。今回は 3 名の歯科技工士さんが参加をしてくれた。そして嬉しいことに、その中には高校生の時に昼食もままならず黙々と一心不乱に入れ歯を作り続ける歯科技工士さんの姿に憧れ、卒業後歯科技工士となり、この活動に戻ってきてくれた方がいた。

彼らの作った入れ歯を最後は先生方が装着調整を行う。念入りに何度も何度も調整をする。痛みや噛めない部位がある場合、明日以降再び調整をすることはできない。

今、この場で完全な機能回復を与えなければその入れ歯は無駄になってしまう。会長林先生



がこの最後の砦を担い調整をし続ける。そしてその横には高校生の時に参加をし、今度は歯科医師となって再び参加をしてくれた先生が補助をしながら林先生の神業のような技術を一生懸命学んでいた。



### 「笑顔・笑顔・笑顔」

今年の活動が終わりを迎えようとしている。周りを見れば至る所で「笑顔」が見える。「耳鼻科ブース」には沢山の患者さんを前に長年の友人でもある木村先生そして看護師原 口さんがいつも笑顔を決やさずご専門以外の症状も患者さんと話し合いながら相談に乗っている。歯ブラシ指導では高校生たちのカタコトタガログ語に住民たちも笑いながら皆笑顔で歯ブラシを動かしている。

そして出口に設けられた「カルテ回収・投薬ブース」では最後の笑顔で患者さんたちをお見送りしてくれている。





「笑顔は世界の共通語」19 年前、この活動が発足された時から会長が幾度となく唱えて来た言葉だ。

現地活動責任者今西先生が活動終了の合図をした。

今年も素晴らしい活動ができた。

私は現地チーム・ラハ・ソライマン・ロータリークラブのリーダーでもあり、15 年来の友人でもあるリック氏と握手を交わした。

「今年もありがとう。皆さんのお陰です。」彼は言った。「私たちの友情は永遠です。来年も頑張りましょう。」

最後の荷物を積み、バスがホテルに向かう。まるで野戦病院のようだった治療会場が元通りの静かなバスケットコートに戻っていた。

私は毎年最後の活動が終わるときに去来するさわやかな安堵感」と少しの寂しさに酔いながら来年の活動のために再び頑張ろうと心に誓いスラムを後にした・・・。

「感謝を込めて」

今年も大きな怪我や事故も無く 110 名が全力で活動し、無事帰国できたことを心から感謝申し上げます。

19 年前、たった 12 人で始まったハローアルソンは今では 100 名を超す仲間と共に現地に向かい、そして年間数十万本の歯ブラシをご協力いただけるようになりました。また、全国には各支部が発足され、多くの方にご賛同いただき、毎年素晴らしい活動を行うことができます。ご協力頂いた皆様に慎んで感謝申し上げます。

この活動は会長林春二先生が「一人でも多くの笑顔のために」そして次世代を担う高校生たちと共に本当の心の豊かさとは何か、真の国際貢献とは何かを大人の私たちも一緒に なって悩み、学ぶことを目的として作られました。

私たちのチーム名「ハローアルソン」は現地活動責任者今西先生が 22 年前に最初にフィリピンを訪れ彼の下に初めて来た当時 10 歳の男の子「アルソン君」から由来します。当時アルソン君は上の前歯 4 本に重篤な虫歯がありました。その歯の痛みを取るには抜歯しかありません。今西先生は歯科医師としての無力さを感じながら涙ながらに 4 本の抜歯を行いました。10 歳にして大切な歯を失う現実……。帰国後先生はもう二度とこのような悲しみを作らせないためにも歯を守る大切な道具「歯ブラシ集め」を呼びかけ、そして会長 林先生を中心に私や仲間が集まりこの会を作りました。

来年で私たちは 20 周年という節目を迎えます。

私たちが毎年無事に活動ができるのは紛れもなく皆さんのお陰です。どうぞこれからも ご支援ご協力のほどよろしくお願いいたします。

そして私たちはいつまでも皆さんから託された 1 本の歯ブラシに込められた「優しさ」を決して裏切ることなく誠実に誰からも愛される活動を目指します。

この事も未永いご協力をどうぞよろしくお願いいたします。



ハローアルソン・フィリピン医療を支える会 団長 関口敬人